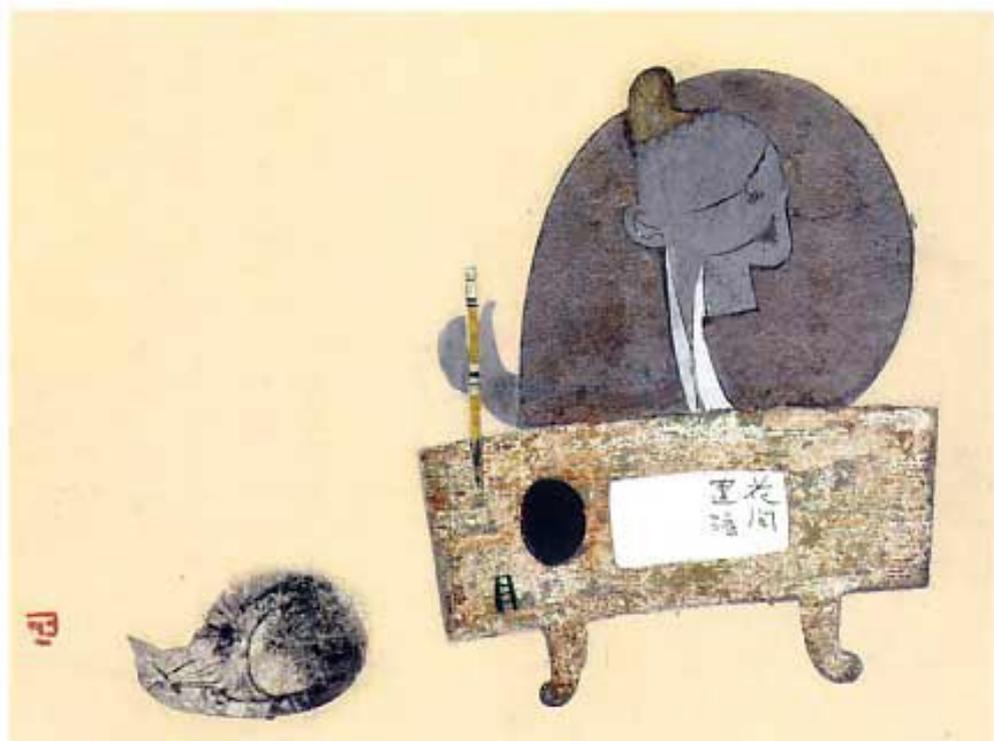


# 火星



平成19年10月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

午後よりは誰もくぐらぬ糸瓜棚

患へる秋の簾に顔寄せて

石舞台叩く男の秋扇

畳みある袴の上の秋扇

月白の壁にもどれる翁面

印南野の月の案山子を思ひけり

大足について曲りし月の廊

銀杏の匂ひに水の古びあり

野分くる机の上の籠まくら

糸のころの風の向うの芋嵐

# 太白星

柳生千枝子

白靴の鳴り癖を聞く独りの歩  
易々と蠅取蜘蛛の退場す  
風灼けて泰山木を輝かす  
初夏の雲遊びゐて日を洩らす  
白靴や鉄飛坂てふ坂登る  
遠花火ひらきて遠き恋ありぬ  
紫陽花の一花の重さ揺れもせで

杉浦典子

子かまきり息ほそうして吹いてみし  
子かまきり吹けば葉裏へまはりけり

蛙鳴き止みたる水の暗みけり  
ユーカーリの木の瘤に梅雨明けてをり  
海の日雨の近江に来てをりぬ  
七月や鳥居の脚に波の来て  
みづうみの漁港朝顔咲きはじむ

浜口高子

町ぢゆうに潮の香満つる星祭  
枯れつぷりよき余り苗雨となる  
すかすかとオルガン踏み暑氣中り  
梅雨川の上の厨の薄日ざし  
あつあつと冬瓜吹いて夏痩せて  
青竹を落つ水音も祭あと  
身ほとりに白鷺眠る早の夜

# 火星作品

## 山尾玉藻選

浜木綿の花に届きし床屋の灯  
八幡 大山 文子  
大寺の曝涼に眼の慣れて来し  
ひまはりや昼の校長室灯る  
本堂を赤子這ひをる土用かな  
本尊に網戸二枚の真新し  
電柱が咲いてのうぜんかづらかな  
明石 戸栗 末廣  
白靴の住職夜の門いで来  
真空の音のしてゐる夏蚕かな  
執刀医金魚の水を替へてをり  
夕河鹿髪長き子が橋の上  
祭 笛 山の 上 まで 段 畑  
豊中 廣畑 忠明  
ここからも通天閣のある夕焼  
錦湯の煙突夕立上りけり

あご紐のよく笑ふなり夏帽子  
夏蝶のとまるでもなし草の丈  
紅萩に触れて入りけり浄瑠璃寺  
籐寝椅子父のまなじり濡れてをり  
木綿裂いてはじまる夏越祓かな  
眉月に出を待つ太鼓神輿かな  
砂浴びの鳥に土用の波がしら  
囲の蜘蛛のまほらの月をとらへけり  
鬼瓦のまなこ濡れぬる暑氣中り  
鶉篝にいよいよようすき母の膝  
発つまでの音のはげしき競渡かな  
桑畑に父立つてゐる帰省かな  
青梅雨や歩行器行つたり来たりして  
夏木立子供の丈の手洗ひ場  
虫送り子に新顔のありにけり  
みどり児を抱いて蚯蚓を跨ぎけり  
土用太郎麴を寝かせ始めたる

大和郡山 城 孝子  
八幡丸山照子  
姫路 高尾豊子

# 選のあとに

山尾 玉藻

大寺の曝涼に眼の慣れて来し 大山 文子

古刹の中には収蔵の品々を虫干す際に一般公開している所も多い。掲句も「大寺」とあるので、格式も由緒もある寺院での「曝涼」の景であろう。恐らく日盛りを来た作者は、初めは寺院のうす暗かりに眼が効かぬまま、「曝涼」特有のあの湿っぽい匂いに少々戸惑っていたのであろう。「眼の慣れて来し」は、辺りの様子が徐々にはつきり始めてきた意であり、好奇心に眼を輝かす作者や珍しい品々が並ぶ景を彷彿させる。恒星圏作品へ虫干を拝見にゆく眉引けりにも注目、こちらの真面目な俳味はなかなか貴重である。

電柱が咲いてのうぜんかづらかな 戸栗 末廣

句意は一目瞭然、凌霄花の咲きぶりが鮮やかに映像化されている。「電柱が咲いて」の大胆明晰な発想の転換で、電柱全体に絡みついて咲く凌霄花の旺盛な生命力を表現して余りある。同時発表の「真空の音のしてゐる夏蚕かな」の「真空の音のしてゐる」も秀でた措辞である。「夏蚕」が一心に桑の葉を食む音に不思議な透明感と一陣の涼気が漂い、奥行のある詩性が感じられる。

ここからも通天閣のある夕焼 廣畑 忠明

「通天閣」は庶民の街・新世界の一大シンボルであるが、

その外観はお世辞にも瀟洒とは言えず、しみじみとダサイ。しかし、上町台地の思いがけない場所からその姿を見付けた時は、なんとも懐かしく嬉しく、自分の中の大阪人の血を実感する。「夕焼」に染まっていれば尚更である。

砂浴びの鳥に土用の波がしら 丸山 照子  
青空へ投網放りし土用かな 坂口夫佐子

一句目、無心に砂浴びをする鳥影と繰り返し立ち上がったくる土用波を切りとり、静と動のモチーフを放り出したような一景である。しかし、二つのモチーフは独自の存在感をアピールしつつ、且つ深く融合し、しんとした「土用」の世界を描き出している。作者はこの点を深く意識しつつ、その意識に溺れることなく、淡々と客観的描写に徹している。自然、描写の眼の確かさに因る、写生を超えた写生がここにある。

二句目、鍛錬会の今津の作であるが、実際は「土用」には間があつた。「青空」に発止と開いた純白の「投網」は非常に美しい。だが、作者はこの美しさに流されず、美しさの中の張り詰めた気を見逃さなかつた。そして即、「土用」を直覚したのである。吟行では、眼前に見えているものの奥の真なるものを見定めなければならない。但し、こころの置き所が確かでなければ、それもなかなか困難である。(以下略)

# 恒星圈

深澤 鱧

蓮見舟この世の涯に出るやうな  
開襟や折合ひつけし日の多き  
天瓜粉益荒男振りの嬰に打つ  
みどりごの求肥に似たる裸なり  
少年や草木虫魚入道雲

野澤 あき

廣畑 忠明

苦しみの一つ二つやねこじやらし  
弟の七回忌なり百日紅  
通院の枝の先まで青銀杏  
買うてみる男前てふ冷奴  
大墓地の一基一基の炎ゆる影

朝顔鉢並べ旅籠も奥近江  
朝曇り琵琶湖周航歌流れ  
朝の砂踏んで湖岸の夏行かす  
河童忌や考へてゐる青蛙  
山鉾に雨上りなる東山

波田美智子

堀 志皋

綿の花活けて亭午の珈琲館  
梅雨晴やいつもの山の美しき  
草刈りし香のただよへる雨催  
木下闇十七色のサインペン  
石道寺車のドアの尺蠖虫

べらばかり釣れる時刻となりにけり  
屋上のガーデニングの梅雨菌  
夏霧の黒四ダムのメールなり  
子供との距離思ひをり皮鯨  
熊蟬の真つ直中の目覚かな

# 獅子座

山尾玉藻推薦

奥田順子

叡山へ雲の奔れる宵祭  
夏萩の二本ばかりの卒塔婆なり  
ひなげしや袋のやうなマタニティ  
直立に金魚餌を食ぶ盆の昼

藤田素子

夾竹桃咲いて車の汚れをり  
岡持の行く炎天の老松町  
雲の峰ちんちん電車で帰る家  
大阪の夜を照らしぬ熱帯魚

大城戸みさ子

白靴のシヨベルカーより跳び降りし  
七夕笹集つて来し橋の上  
神苑の籬に濡れし蛇の衣  
草市のものを両手にはぐれけり

根本ひろ子

梅雨茸の腰なえてゐる笙の笛  
二の腕のまた細うなり梅雨の月  
車椅子たたまれてあり宵祭  
夏負けのきざしの蹄拭ひけり

岩井ひろこ

炎昼や島原小路行き止る  
南座に人のあふるる土用かな  
上京の茄子地に垂るる夕べかな  
甚平のさまになりきし英会話

蘭定かず子

朝顔の双葉出そろふ飛騨格子  
山鉾巡行からくりは翹広げたり  
洛中の空縫ひ菊水鉾帰る  
涼しさや舳の指せる神の鳥

松山直美

朝涼や日矢の先なる竹生島  
七夕や比良の山より水走り  
蟬しぐれ音無き世界とも思ひ  
歳時記を入れし靴や明易し